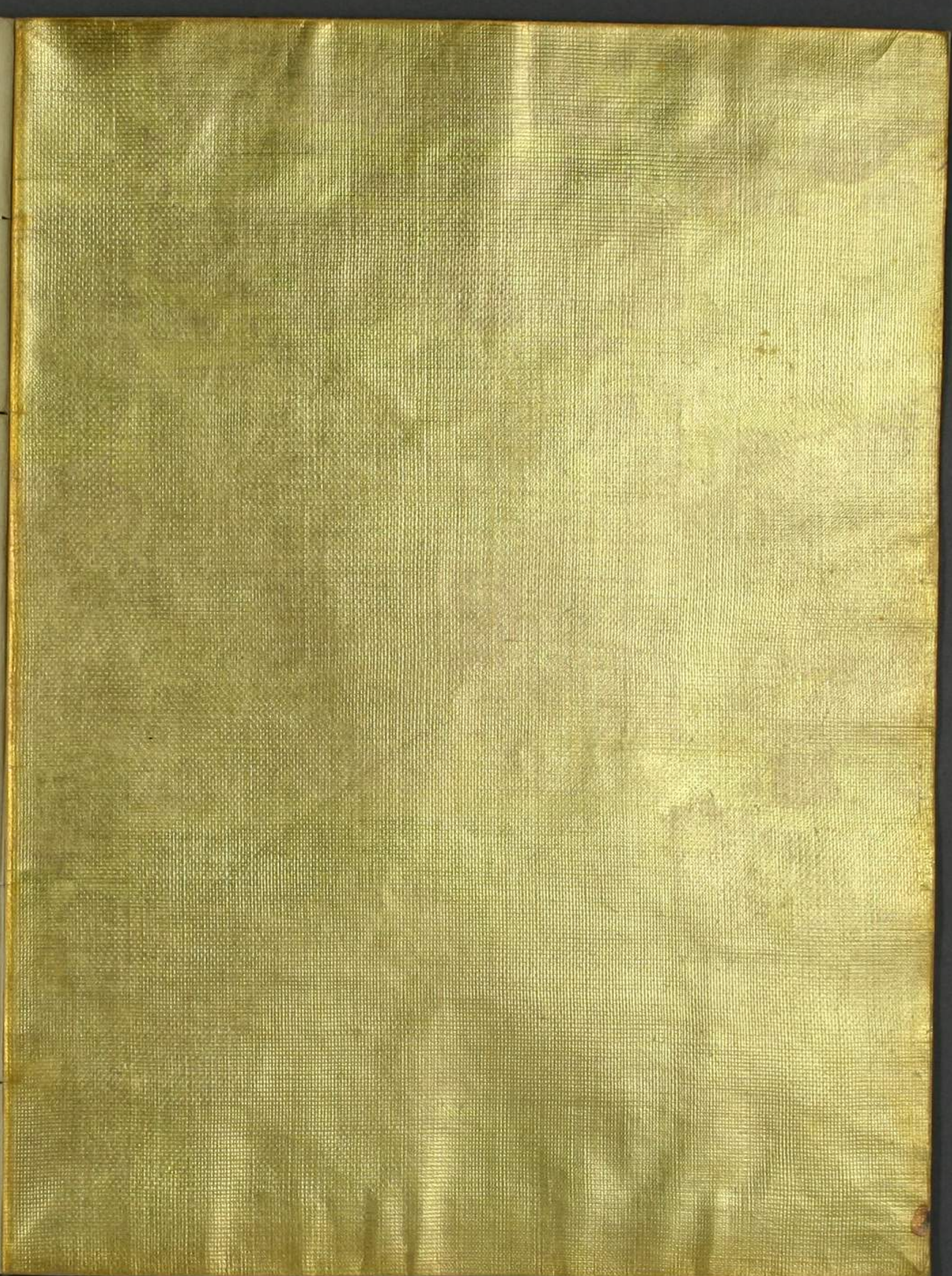
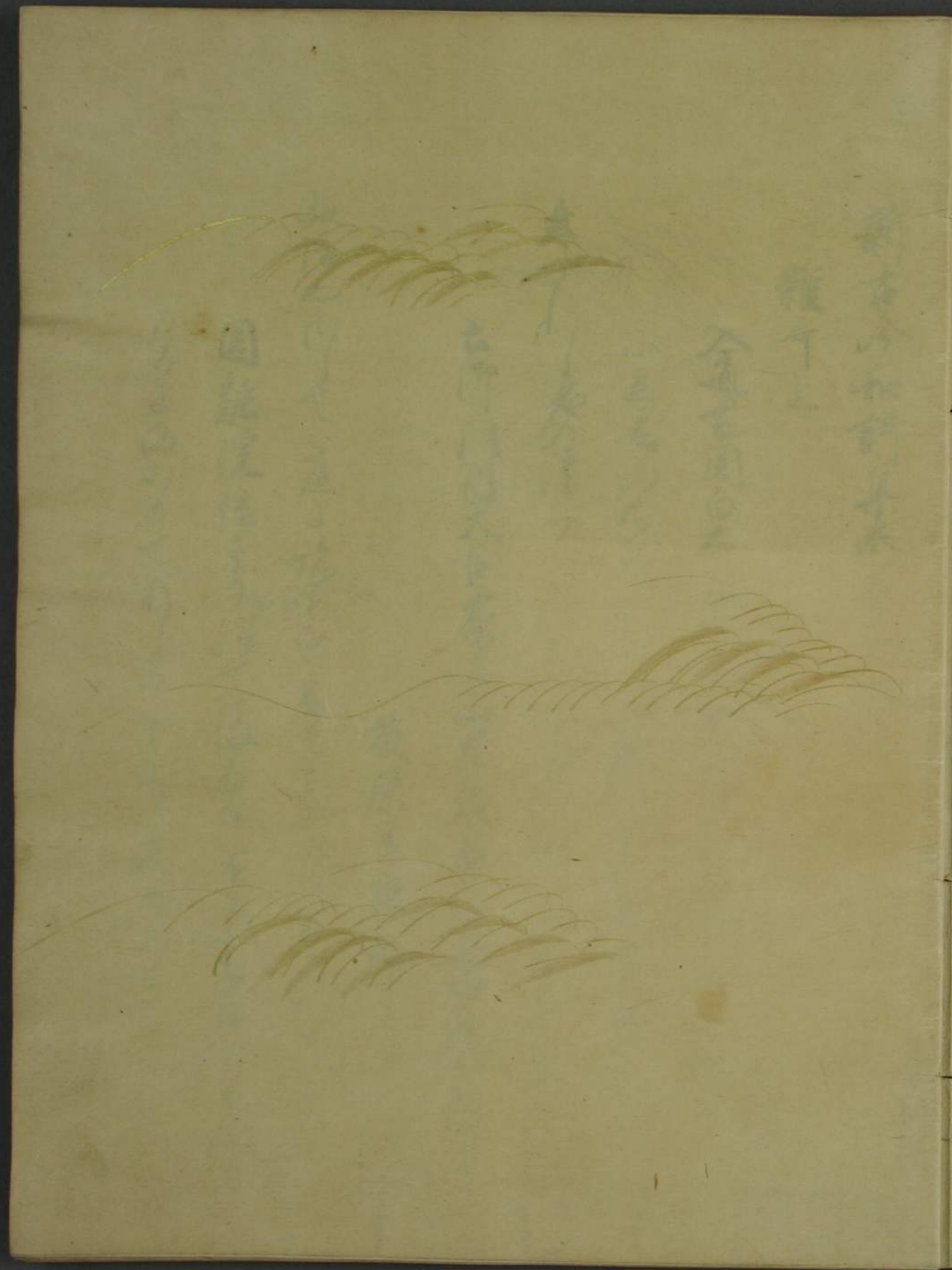




特 別
~ 4
8062
4





新古今和歌集卷第十六

雜歌上

入道前周白右大臣家より百首歌し傳せ侍りけ

小三三の心成

皇太后又右大臣成

年より海の津らうとけより昔の袖はとまやもつらん

土御門門大臣家より山家残書より心成の侍り

友原三三の家下

山信もあつては庭は花はまをさふりり雪乃じりりさえ

園能院位より始てはもさふりり子目しりり

はりり海よりてあふさふりりさふりりりり



色香を思ひ入に梅の花つらうぬ世もくちをみち
と東の院世とてびと治より去庭のお梅と
人傳く
大貳之位

ひめの花さふちかみか人の美とをあともちわら世に
東三條院女御よりつらう時公融院つらう
つらう治よりときくゆてゆきの表婦のいした
つらうつらう
東三條院前摂政大臣女侍

去あまのいこもつらうわらよようのいひとあま
水庭
公融院御寄
宗のそふとあてまうすもまひくふのいひかつらう世も

柳と
菅野太政大臣

道のへの橋木の柳をくねいあはせむしと思ひまてとあ
野らに
深養父

ひらみまはひくはまらうと柳乃をくねあはせとあ
河川院よりたりまらう比叟院左大臣將乃院
橋をわけてはくえんて

園融院御寄

あまのいこもつらうわらよようのいひとあま
水庭
左大臣將乃
わらよようのいこもつらうわらよようのいひとあま

あまのわたりつらき此後徳太子は白川の花
みしらさし給けしは海よりそ讀傳り

源師光

あまの月日のりともくぬ花のまこととふを
教道乃みこのより大納言任の白川乃
家し海よりて又の日をのけりつらき
つよてし傳り

和泉成房

わが人のそしけりやあらしさるる我君の花のまこと
野らた

友原高光

そとよまこと足海のかりし花のまこととふを
そとよまこと足海のかりし花のまこととふを

系持前太政大臣家よ白川院よりそとふ

みの日花の奇そとまこととふを

堀川左大臣

をよらるるそと花のまこととふを

後冷泉院御時由前よそ教新成攝花より

そとをのこもつらまこととふを

大納言忠家

攝花よりてまこととふを

大納言経任

あまのわたりつらき此後徳太子は白川の花
みしらさし給けしは海よりそ讀傳り

云風散花とつと申とある

大納之忠教

梅花さゆき雪のなるとや風のよきとあせしちうらん
鳥羽殿とて花のちりりさうとあつて後
と兼門大臣よ給くせけれ

鳥羽後河原

わが世のつひさあせの花さよこ今世のあつとよとらん
世とのいさしては百首奇よと傳りよ記奇と

皇太后文宣後成

今そ我より世の山れ花とよと宿のわごとみえりうと

入道兼園白右大臣家新合

まはるにかり世のせより無くもさつりかつり花とみえり
わが一家の百首奇よ

照月を雪のよきまうりめくつり花をけ世のいりさうり
まのつり大納院とて人よつり

兼大僧正慈海

尺せとやあまのめつりあつりさうりつり山りまはる
むらた

葉の戸にあかんとあつりあつりあつりあつりあつり

西行法師

常と思ひいふくら花のちの身とてそつらとて
東山よ花のちの身とてそつらとて
常とてそつらとて

安法師

身いふつらとて山橋風のちの身とてそつらとて
野らら

後頼朝

橋あさのおの浦のちの身とてそつらとて
橋為仲お下みらのちの身とてそつらとて
くくくく

加藤左衛門

あつたのちの身とて松山の花のちの身とてそつらとて
松つらとて

法中書生

世といふつらとておのちの身とてそつらとて
百舌歌もつらとて

前大納言忠良

およあつたのちの身とておのちの身とてそつらとて
千八百番濟合よ

五家卿

去のちの身とておのちの身とてそつらとて
景徳院よ林下よ
つらとて

八條院前太政大臣

つらとてのちの身とておのちの身とてそつらとて

園藝院位より給ては実方御下小馬御婦
とわらうりし侍りる事よ山吹乃花と屏風乃
うらちとさけりし給て侍りたり

実方御下

八重のつゝ美とかなぬ山吹のやとあけりよ白^{さすねに}きりま

ゆき

園藝院御寄

九重よあそびやうく款冬のいよぬ美とあそびる人よ

八十首寄とてまじりし時

前大僧正意圖

をの波よなまし未葉うきを遊むる友嘆田子^{かや}はらり

世とのまてはは月一日東門院太皇太后

とくりり時衣人の出らうおこなりしとて

法成寺僧正攝政太政大臣

ゆき衣花のまのよぬさしよ我うまれば美をゆらぬま

ゆき

上東門院

唐しんをゆらぬりぬるまの衣よいと心のみもみつ

日月衆の目まて花らりのうりて侍りる年その

花を使乃少将のかさしよまうまようとてま

侍り

紫式部

神代よいれまのやまき人梅花のうらうらまはらうらま

あはれのこころよといひて

或子日記

あはれこころのこころの接枕かのこころい
た衛門若家通申よ竹久り時宗の使とて
いじもちよと申りて竹久り院乃若房様
よとつりりり 諸人不知

あはれこころあはれこころの月影よい
た衛門若家通

二條院沖時又月又目菖蒲の影と影と
あはれこころあはれこころの月影よい
竹久りよと申りて竹久り院乃若房様
よとつりりり 諸人不知

あはれこころあはれこころの月影よい
竹久りよと申りて竹久り院乃若房様
よとつりりり 諸人不知

あはれこころあはれこころの月影よい

あはれこころあはれこころの月影よい
竹久りよと申りて竹久り院乃若房様
よとつりりり 諸人不知

小辨

あはれこころあはれこころの月影よい
竹久りよと申りて竹久り院乃若房様
よとつりりり 諸人不知

赤深清門

八月の夕べにふとあつ月影は海の西をさぐる海は

は懐百と音の中よ八月ぬと

皇太后文筆後成

らるるいまの朝のぬそこのあまじつをそめを袖を

都一程に

乾山院御寄

独り宿の床友わさくかきこの露よぬまの目とさこ

賜會后更よろして善文よまひひらる時少侍

義孝久しくぬいさうらるるまてこの花よつを

てつらりさき

恵子女

まへつみまはるるふとまはるるふとまへつみまはるるふと

月わくゆらるる春人の曇とつらつらりしや

まはるるぬのつららるるつらりしや

和泉武部

思ひわく今春の雲いとしそまへつみまはるる月の光かろらん

都一程に

七條院大納言

思ふおもひを秋にゆらるる秋のうめと誰よこいさ

まはるるぬのつららるるつらりしや

中務

袖のうの信よこしに秋凡いそのうすそ涼しくらん

業平朝下のちうそくつうで侍りし

紀三常朝下

秋やうる病やゆふとあしまたあつた海のちうそくつう
らやうらうらとあまらふ侍りし人のうはし
りあひあつたのうら七月十日のは月よきと
てうら侍りし

紫武部

あつらあひてうやそれしうあつし電うたれたり
まこのまをうらう時がゆき友原統理やうら
らまうらうらうらとせそむいあつたあつた思ひ
あつらうらうらとせと御後して

三條院御奇

月影の山乃をうけしあつたあつた信せよとわやうら
影うら

友原為時

山乃を山生とてまうら月影し福ぬあつたあつたあつた
春後正光あつた月影よあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

伊勢大捕

うらあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

春後正光

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

文治のちあひ百首奇くも侍らるし懐四の
奇してよあり
右近中将三備

らよいほりて時をまうらうまのしつれきの上り月
百首奇なるし一秋奇

二條院瀆政

ひつしうせ井とちる秋の月今いせ袖よやと人
月前述懐しつらん代よあり

友原源通お下

いひあかむるしつし又思ひあよあまの秋の月
石山は海うて侍りて月とてし侍らる

友原長能

秋あしくお侍らんし心の巻よれさうら秋乃秋乃月
秋いらん

秋恒

あたらとちりてらるふら月のらうらし秋の初め
月乃あつしけれ秋あひかつしひあらん乃これ
は乃月冬みかやとらけしにあり

源道濟

こつしは秋てあつてよんしふあつしぬの月冬
秋あつれきてわすれ侍りては月のあつて
あつて

増基は所

あはれのうらふ徳のしほは月のおよげぬる
徳宣お下へ傳へのおはぬつららしくもいけぬ
女のおしよはあけて傳へてあはれうらむ
みゆきまに
よみ人あはれ

あはれの人をまじらぬのふたはあはれ月を
百首歌をもつ時 撰政太政大臣

月又つひつりの人さあはれまゝのたもく庭の松を
又十首歌をもつては山家月のたも

兼大僧正慈圓

山里は月をうらむ人あはれにえり風をまよふ

撰政太政大臣およつ時月奇又十首

よまをゆかりよ

ま明乃月のゆきまをあはれ野寺の静いまくつり
れり家の奇合は山月乃ら伝ふ

友原業清

山のよとあはれ松乃木のるよとつりつり
和奇可濟合は深山院月といふ

鴨長明

あはれつ独太山のよれのたよらつりつり
徳野はあはれつ何なるも奇乃中つり

友原秀徳

わく山の木葉のおつる秋の風よもしくも夕の月をゆき
月とあつた方のうらやまを消えてさうくまじり風が

山家の心と清ゆき 歎園法師

なまゆい葉のあまのあまのうらやまのえらくあはれ月影

むらさき 花山俊河守

鴨の月とじうと思ふをくらくゆきなまゆい

伴勢大輔

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

和泉武部

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

家と月照水とつらとくまじり

大納言伊信

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

秋の葉よやまのいよまのあまのあまのうらやまのえらく

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

あまの月とじうとあつたあまのあまのうらやまのえらく

長きけりし月より袖もさうりたるし
の秋と思ひいづ
月のみよとていづはまや秋と出ぬ秋ありを
そいさういほやとていづはまや秋と出ぬ秋ありを
あまのつらさの秋と思ひいづはまや秋と出ぬ秋ありを

入道親王光性

かろかりてさういづはまや秋と出ぬ秋ありを
友原道性

秋の秋乃月よとていづはまや秋と出ぬ秋ありを

八十首奇めたりよ 兼大僧正慈雲

秋と色く月とすしつらさの秋と思ひいづはまや秋と出ぬ秋ありを

百首歌も時 友原隆信朝長

かろかりてさういづはまや秋と出ぬ秋ありを

まのーねん 源光行

ふあろくの秋の月よとていづはまや秋と出ぬ秋ありを

千八百番奇合よ 二條院禪政

あつたよ月やあつたよとていづはまや秋と出ぬ秋ありを

世よとていづはまや秋と出ぬ秋ありを

年越法師

あつたよ月やあつたよとていづはまや秋と出ぬ秋ありを

山里とて月の秋とていづはまや秋と出ぬ秋ありを

わがくそくは月の白きよびつらりともおぼはれん

古月と

寂蓮法師

わが心の宿りの月はずとん我とてあや青とみよに

適悲の月とて 平忠盛卿下

とつれきんじつの人を教めて宿りの物々をぬる月

わいまりて宿る人の心は海とてありまはり

その人はわが心とていづれもあつた宿る月

のうへて宿る月 兼中納言遠房

とつれきんじつは宿る人の心は海とてありまはり

むらさ

神祇伯歌仲

形井の友の月のまはりてあや青とみよに

俊直法師

難波の志はひはあつた宿る人の心は海とてありまはり

和奇可濟合は海邊月とて事と

兼大僧正意圖

わが心の宿りの月はずとん我とてあや青とみよに

定家卿下

とつれきんじつは宿る人の心は海とてありまはり

友原秀徳

わが心の宿りの月はずとん我とてあや青とみよに

能野は海して舟は月宿と海邊航を
こころをなすのこころつらうらうらよ

源具親

かゝあふと思そくやゆらん月まの海のはるの舟舟
八十はおほくおまうては百首奇りよよ

皇太后文皇后成

あふとれてしやとらふ秋山の暮らよよ松じのたぐ

ふみ百番濟合

あまわり秋の庭らうわらされまて清らん舟の夕暮

形らん

おはは師

雲がら遠山この秋もいおりのやうもふ悲しことよと

八十首奇りよよ海せゆらりし遠懐の心は

よとゆらり

守元は親王

風そよと志のこころのらよの世と思ふ秋はえよ海とら

寄風懐回しよまよ

左衛門督通光

あさらふや袖は杉に秋の暮こまぬ夜とつらうら

皇太后文皇后成女

くたのうらまらうの世とらうらみの舟の秋は

形らん

親部成仲

返し

前中納言長

世帯は秋をあらまき秋まとい海にゆきあそぶのまき
清涼殿の庭よりゆきあそぶ菊と信よりゆき
はかばか

冷泉院御歌

うらやみの外の秋をれ今にまきあそぶ菊のよとの清
去月の比野まき前裁し

源順

そのまき野のまきのうらやまきあそぶ菊のよとの清

影より

よき人に

山川のまきゆき水とあそぶて秋をうらやまの松風

百首歌なりし時 古河門内大長

あそぶふけ乃水とあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ
寂勝曰天皇院の清子よあそぶあそぶあそぶあそぶ

可

友原家澄御下

君の代はあそぶ海川の理本と水のたよまきあそぶあそぶ
元柳のまきあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

赤深御門

あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

此の巻はくわくもなほて書れりしなり

後白河院御奇

病の危きまゝ海にのりてありし時白河院にありしなり
雷ふきて迷懐のらげあり

皇太后文成

松のや栢よもろ書もよもろわきげの身よもろ
佛名のあもよもろ花と山境して

朱雀院御奇

時よもろおほし清らにむもよもろくもよもろ
花山院より井なきてよの年御佛あり

くろく花よもろてり侍り

前大納言御

かゝるもよもろあつる友の中よもろこよもろ世にいもろもよもろ

た

御形宣旨

あゝ友とつる世のせとて思ふはしおほしよもろあつる

む

皇太后文成

かゝるもよもろあつるとけ年のかゝるもよもろあつると

慈覺大師

あゝよもろあつるとけ月日とまもろあつるとけあつると

新古今和歌集卷第十七

雜歌中

朱鳥二年九月紀伊國し行幸の時

河崎白子

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

野らん

武部信守合

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

志原兼平卿下

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

秋人不知

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

貫之

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

忠岑

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

志原兼平卿下

あはれはのほねのこゝろまよひくせとふらひのあはれん

後徳子長

朽よりうつろの橋とてみまはるるのうらみは枯風を吹
影くらげ 拾中納言定頼

おきりせぬふゆし難波のこ曉けくはそよぶる
まよぬのこよあがりてよめる

友原春若

とぬの浦のさしあがりあさめとらるるよあはれはつらあまの
つらあ

天磨御時原凡奇

壬生忠見

枯風の風吹くありあはれにぞしらさつとぬのこよ

八十首奇ふくくをまらるる

弟大僧正慈園

とぬの園友とてあはれ浪の若とあつとて宿とらるる

和奇不濟合よ園治枯風とらるる

撰政太政大臣

今とぬぬ不敵の園屋の板ひくわきけはさる枯の風

のる浦とらるる

源俊賴卿下

あはれとぬぬあはれとぬぬ浦風よひらりあつとぬぬ

肥中北の代とらるる

宗蓮法師

和奇の浦と松の葉のよまらるるは指よとらるる

千二百番詩合よ

正三位季徳

みゆののこよあはれとらるるは指よとらるる

友原家衛尉下

いひてとねりてせきけり吉野の行くの杖の夕言

千八百番齊合よ 右邊の普通具

しらよるまといそと松の序よあつらふ風の着る

守元法親と八十首奇よぬせ約々よ宋岳の

らとよあり ち家尉下

誰とて息の終てとありよのそつきてゆ風うりや

ちねとて齊合一約よ山家風とつら成

巨秋の院母後

山家の世のうらと母任徳のあつらふ家風と

百首歌也よ 家陸尉下

滝のそと松のあつらふれあつらふかとのあつら

都ららに 兼就は師

あつらふと世とのまを母とつらふ山家の世とつら

女将高光横川よあつらつてあつらつてあつら

よは服つらふとて 権大仙を師成

お山の昔の衣よつらつてあつらつてあつらつてあつら

ち 如光

白麻のつらふとあつらつてあつらつてあつらつてあつら

徳宣尉下大原野よあつらつてあつらつてあつらつてあつら

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

法入

あはれなる御心よ

五

徳宣卿

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

あはれなる御心よ

百首歌中時

二条院瀆政

うつくしき松の世と松山のまはりせしまふ年うよらり

山家松といふると 皇太后文安後成

とよとつまふうらふ宿れ松の世といふと松のまはり

春日社濟念よ松風といふ事と

友原よ家親下

我らうらむおととつりよ袖よ志くらう庭のまはり

山よ竹の世 道念法師

世とつらむとつらむ松の世といふと松のまはり

女将井の石よ松よといふと松のまはり

一げれ

和泉武部

よ松の世といふと松のまはり

と

女将井石

よ松の世といふと松のまはり

都らに

女将井石

よ松の世といふと松のまはり

よ松の世といふと松のまはり

般富門院大補

よ松の世といふと松のまはり

は輪もよ松の世といふと松のまはり

りたさゆきま

道命法師

とていふことありけりやとて書ぬことありけりや

後白河院拙度寺よりゆりたる物川の

むらさきの便をゆりたるよ

定家卿下

源朝の山子代のつらねとて又海より秋を月乃駒

さきく事ゆりたる

和光院より用白史政下

とていふことありけりやとて書ぬことありけりや

冬は大将たるしとてさきく事ゆりたる

右大臣よりて奏しゆり

東三條入道前撰政太政大臣

ゆりせとてけりやとて書ぬことありけりや

ゆり

會融院中奇

ゆりせとてけりやとて書ぬことありけりや

ゆり

人麿

武士の八十字法川の佃代事とていふ所のゆり

布門の庵みしゆり

中納言行平

ゆりせとてけりやとて書ぬことありけりや

東抄前右政右長布門の御入を備へりて侍り
二條園白門大臣

水と乃重よもりの白雲のものはゆへる布門の御入

寂勝は天王院の障子よ布門の御入

夜原の御入

久々の天降し女よ夜夜を井より入布門乃を記

お後の御入を記

ひしき天の御入を記

野の御入

おのの御入を記

堀川院御入

兼中御入

またの板を記

天唐御入

御入

おのの御入を記

兼大僧御入

おのの御入を記

御入

おのの御入を記

ついでに... 山家... 大僧正意園

兼大僧正意園

茶の宿といひてと又いふらん茶の宿は... 故とて久しき... のことえは約多ねの徳野

大僧正行書

あひまうらうらの徳野... つうていり

安法師

世にせむ山の南の松風... 安法師

おはは師百首奇... 家隆卿

家隆卿

山家の宿は... 百首奇

百首奇... 式子門

式子門

今、我松の... 小侍

小侍

あつてつじ山家の... 撰及太政大臣

撰及太政大臣

馬場の人の... 撰及太政大臣

八十首歌集の序

雅經

新やうの春のよきと成るまゝまつる古の月
後意は仲方ゆりて後子はつらうなる新
そそ子たれとよつらねと

頌首重保

燈をてりくしむるの光のさけと新のうら
まのしら津の國なる山守は海の色にうつら
よ麻草のあつゆりてゆらうらうの海と
わしてゆらうとゆらうとゆらうと

あゆま

西日は昨

八十あまりのゆらうとゆらうとゆらうと
山家奇のゆらうとゆらうと

茶大僧正慈翁

山家よゆらうとゆらうとゆらうと
後白川流のゆらうとゆらうと

或子門親王

とらえのゆらうとゆらうとゆらうと
述懐百首奇のゆらうと

皇太后文筆後成

新古今和歌集卷第十八

雜奇下

山

菅躬太政大臣

是川のさきもさきなるわきとたけいさくく

日

天の原あはれしつる光よいつ世のほのまのら

月

月よふらつと思ひま子後めのやうもあはれ

雲

山つらむいひゆきせのくろく霧ら母さけい

霧

音ゆらて照日ののこいふいと身は海とらるるあ

雷

花しらむとみつあさむきい雷つら里う夏よみ

松

おいぬそ松いなりそ向うらる我思つこの音乃

野

つらふし紫やうのむいあはれいふもいぬ

道

あつちの園ちのこみつる人もゆらあなつた

源順

あひよりのさるの松のちみりさのりるさよとて
山はよびしりしと約る

徳田法師

是の山の下あは彩なまは白ぬよ我おいて
あまふりぬいさくくよらうそくつらぬそ

法性寺道前撰政大臣

かれそく花の枝と打たしけの衣とあらう人川
后よちらゆり時冷泉院の后文乃所記
とてまうりまうりくと出家の時とてす

己始とて

東之條院

花のこのむらうと打たしけの衣とあらう人川
とて

冷泉院太皇太后

ついでとて光の枝にまはさておひて
と東門院出家乃後こののらゆり
院のそとまうりものとて今て梅乃枝よつ
てまうり

枇杷白太皇太后

かろらん衣の文とおひやうかきやうれま
と

と東門院

ゆらん衣のむらうと打たしけの衣とあらう人川

伊勢

白鳥をよびてかひまて百歳のうららふ秋の物をかへし
殿とてまよひてくまひたり

友原清正

天津風を舟の浦よ舟もつの子も舟よつとつ
二條院菩提樹院よありまて後のまじり
とまひてく大仙の御位まのりてつるるの目も
乃つつうららるるよまへに
いしりのまじりま井もつとつやまはまらてまあまを
夜勝曰大皇院障子よ大信とまもま所

定家卿下

大よの浦まのりまはまのりまはまのりまはまのり
夜慶は御十載集とままなりつるるま
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり

後白河院御奇

後白河院御奇
後白河院御奇
と東の院高陽院よありまのりまのりまのり
つるるまのりまのりまのりまのり

後朱雀院御奇

滝つせし人の心成るをきし
指中ゆき道後後指遠なるひゆるり
わらうとゆつとゆつとゆつとゆつと
とそまひしゆいともあはつとゆつと
とそまひつとゆつとゆつと

因防門侍

後ゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるり
奇ゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるり
ゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるり

壬生忠見

ゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるり
越女の心成るをきし

友原の忠見

結おとしぬるゆゆるりゆゆるりゆゆるり
大に奉周るゆゆるりゆゆるりゆゆるり
ゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるり

赤澤清門

まよひてゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるり
ゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるりゆゆるり
人よつとゆゆるり

伊勢大捕

八十首奇をまうりし時

前大僧正慈海

あはれなる御心よふる朝のうき方なりそと記あるに
例する事侍るよき動もよと侍たり

あはれなる御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

おしと

大僧正行常

くちりて御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

馬原元棟

くちりて御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

おしと

あはれなる御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

延喜御時女苑人内通白馬節舎んたり

車よりくちりて御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

挨拶遠使のまじりて御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

けれ

女苑人内通

あはれなる御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

あはれなる御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

例する事侍るよき動もよと侍たり

おしと

因防門侍

あはれなる御心よふる朝のうき方なりそと記あるに

述懐の心状を伝ふる

右近中将三備

とて了ぬ我力そつとつとつととと思ふらよるをゆせて

都らに

よしへに

うらやうのわらわら母よ古の友とらんをゆせて

源師光

うらやうのわらわら命は後の世とて母のなげかり

頼成李保

うらやうのわらわら母よ古の友とらんをゆせて

若木田長延

うらやうのわらわら母よ古の友とらんをゆせて

入道兼周白家百首奇をゆせて

刑部心頼補

川舟のわらわら母よ古の友とらんをゆせて

都不知

大僧都寛弁

おつとりの月日いふやも川をぬ浪よわき袖を

よそゆたふ百首奇を源家長よりよせよ

つらうのわらわら母よ古の友とらんをゆせて

若原行能

うらやうのわらわら母よ古の友とらんをゆせて

身のたそむかひ侍て社のまらひひせて
ありあて侍多うよあひととてある

鴨長明

ふさふさのいほ海そりあういふ契うてまきらるる人
影らん

源季京

あふくあまのふらふら(あまのいほ)とて思はてりほ

おはは師

いづつとほもいほちもいほてあん業の居然りまを
月のいほらばとていほちたる路の身といふ邊舞

六十首奇中よ

兼大僧正慈香

あふまふいほくあふまふいほくあふまふいほく

あふまふいほくあふまふいほくあふまふいほく

あふまふいほくあふまふいほくあふまふいほく

あふまふいほくあふまふいほくあふまふいほく

あふまふいほくあふまふいほくあふまふいほく
兼大僧正慈香

兼仁は親王

あふまふいほくあふまふいほくあふまふいほく
兼大僧正慈香あふまふいほくあふまふいほく
あふまふいほくあふまふいほくあふまふいほく

兼右大将頼朝

みちのくにを治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

世のつらさこそなり

大江朝宗

くまのくにを治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

世のつらさこそなり

信慎云

道長の治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

白鳥の侯

かたのくにを治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

持中卿の遺言

かたのくにを治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

松の木のかげにこそ

性定上人

かたのくにを治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

世のつらさこそなり

後頼朝下

かたのくにを治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

皇太后の御遺言

かたのくにを治むるにこそはなほつらつらとてよつてはかた

春日社所合よ松風とてよつてはかた

家隆卿下

春日山首の埋木くらぬくしきよつきこときよなる風

巨秋門院母後

かきぬきけい海をこちもぬき若のぬりこぬり松う巻

らううまあてうううなるこぬりわきよ

女御殿子女王

んまんのそじきそわらせゆよあつたの秋の力といふせん

條時宗の舞人よとらんそりふゆらうを四位

て後宗目つらうらう 実方御下

衣子の山井の水は新れし程々のこの言をきくこ

えく

道信御下

いづの山井の衣するもきくはらうの力もぬりまは

後冷泉院御時大尊舎よ日をぬくこと

実基御下のしよつらうはとて先帝の御時

思ひそそそていひつらうらう

加増左衛門

ぬらううきそぬみまよと衣あぬじうの言をき

秋衣きうくはと衣あつた影体よと人よ

おかせして水あつたうらうあつたあつたの奇

と湯鏡して

天曆御奇

秋のよの曉のきうくは人つらうてきうくあつた

秋雨と

中務少輔平親王

かきつりつゝ思ふ事ハ目々こころ小形のこころつれづれは

都らら

小野小町

あゝの風よもみちて人こころ遠懐こころのあつた

述懐百首奇こころ時紅葉

皇太后文宣後成

わゝ吹雪のお葉乃日こころさうこころつらこころゆめ海

都らら

宗徳院御奇

うゝねを秋の風よおこころらこころきこころうこころさこころあこころはこころしこころつこころ時

文門卿

竹の葉よ風吹こころらこころ夕暮れこころのこころあこころらこころはこころは

和泉武部

夕暮れこころのこころさこころみこころぢこころよこころあこころらこころ思こころふこころらこころをこころつめ
くれぬこころらこころいこころとこころひこころてこころぬこころんこころ入こころあこころひこころのこころ種こころのこころつこころとこころて

あはれ法師

あこころらこころつこころ入こころあこころひこころのこころ種こころ乃こころをこころたこころあこころひこころあこころらこころいこころんこころにこころはこころん

暁の心こころあこころらこころ

皇太后文宣後成

わこころらこころつこころつこころのこころ枕こころをこころさこころつこころてこころさこころつこころひこころをこころさこころつこころつこころのこころあこころらこころ

百首奇こころ

或子門親王

暁のゆこころつこころをこころさこころらこころ衣こころかこころりこころかこころつこころつこころのこころあこころらこころいこころんこころにこころはこころらこころ

唐の宗廟と皇の廟とをいふ

和泉武部

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

大僧正行号

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇太后文宣後成

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

後頼朝

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

僧正通昭

皇の宗廟と皇の廟とをいふ

都一 丸

おま前なる旨

光ま川枝よのまなる海の名まをなむまは

野分一もあわなむまは

まらるる人 在深清門

あつ吹風をいふまはまの小枝。うまのま

和泉武部みらまはまは

教道親まはまは

うらろまはまの田乃枯まは

也一 和泉武部

枯風まはまはまは

まはまはまは

持仁のまはまは

つら一 皇太后まは

まはまはまは

都一 前大僧正まは

まはまはまは

まはまはまは

まはまはまは

まはまはまは

まはまはまは

西行法師

中世の宗教的詩歌の代表として知られる西行法師の歌集『西行法師集』は、その内容から見て、平安朝末期から鎌倉朝初期にかけての宗教的詩歌の発展を著しく示している。この集巻には、西行法師の代表作である『西行法師集』の巻名が記されている。また、この集巻には、西行法師の代表作である『西行法師集』の巻名が記されている。

入道前園白太政大臣

この集巻には、西行法師の代表作である『西行法師集』の巻名が記されている。また、この集巻には、西行法師の代表作である『西行法師集』の巻名が記されている。

大僧正行基

大僧正行基の歌集『大僧正行基集』は、その内容から見て、平安朝末期から鎌倉朝初期にかけての宗教的詩歌の発展を著しく示している。

野らん

野らんの歌集『野らん集』は、その内容から見て、平安朝末期から鎌倉朝初期にかけての宗教的詩歌の発展を著しく示している。

百首歌集 一冊 前大僧正慈圓

百首歌集の巻名が記されている。また、この集巻には、西行法師の代表作である『西行法師集』の巻名が記されている。

後頼朝

後頼朝の歌集『後頼朝集』は、その内容から見て、平安朝末期から鎌倉朝初期にかけての宗教的詩歌の発展を著しく示している。また、この集巻には、西行法師の代表作である『西行法師集』の巻名が記されている。

下田に師

志のあはれむに
影さく
師道法師

教らぬ力いさむ物よ
は橋行遍

あつたか今切末と給人
守元は歌と入十首歌と由せたりり

源師光

なしてはけいさ
まのいらん
八条院言余

うすむいといひ目
あはは師

信るらぬ
法師抄

中つて又あつた
何事もおとろゆ
らぬ是あまた
三位後成し

とてそは流おしつりつらわいよあいらま
ゆるり
あは江師

とて世この信のまらけいりあまのまらけ
千載集えいゆるりつらわいよあいらま

皇太后文筆後成

とて末の我とてあまのまらけいりあまのまらけ
崇徳院一百首奇なるよき常奇

あまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけ

百首奇よ
或子門親王

くねいあまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけ

清乃あまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけ

はのまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけ

都いらん
中務卿具平親王

風を獲の葉とてあまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけ

蝉丸

社風とてあまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけ

あまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけいりあまのまらけ

新古今和詩集卷第十九

神祇奇

まろめやうの子目の娘小松おひんあまてさるもつと
い奇を目台社目のしらの山は梅ありて子目
してゆらる東人の友よみくらとまじ

まろけなくおろくつと我宿のあまつらぬ梅のまら枝と
い奇を遠久二年乃まねらつとつとつとつとつと
くらめ安東寺の梅とありてゆらる東の
友よみくらとまじ

補陀洛の南は春よまきと今をさるんまきとあまらる

い奇ハ真福寺乃南園堂はくらりくらりあつ
くら時ま目れ板のまのぬ祓よまきとつとつと
あやいしむちやうすれつとまのむあひぬあよりあやと

任名乃神奇とまじ

いさろり子毛ぬぬとまのえの松を二ふいあひつらあ
い奇をあつとつとつとつとつとつとつとつと
まのま位のえの松を二ふいあひつらあ
よまてまらつとつとつとつとつとつと

じつあまのあひまはつらつとつとつとつとつとつと
任名おれよ任名よつとつとつとつとつとつとつと

結してあるなり

人志をいひまわしとちちやゆふ林のつらまてきよとよまて
休奇の侍賢門院堀河や海よのちのちより徳興
へゆきてゆかりよ春日まゐるしよよ一の友と
なかりなほはゆいんと思ひてゆかりとよ
らるとりゆかりと院室一の思ひとよまじ

道とてかたごころふしつまつ思ひとよまは我もよまじ
あのみ陸奥よすもくろく人の徳野へ二年
ゆうてんとおとそまじりてゆかりとよまじ
くろくりなほ今二つひとといんよせんよまけとて

由あはゆきりるる春の友よまじりよまじ

おしし事よあまらまてさう流の志りよまじりゆきん
休奇の力のつめり事と歎てあつよのめり
ゆいんと思ひまらるる人徳興の事今より道
あしてゆかりとよまじりよまじ

秋のむくつつよまじりよまじりよまじりよまじり
頼茂の休奇よまじり

かえよと新まじりの水の面よつらつらとよまじりよまじり
あま又頼茂へゆうてまらる人乃なよまじり
こころ

わがこころにうつらうつらと
石清水の石舟とらんらん

おの海もりの波のうららとふすまんのかりの世世

世奇を称は天皇は沖時和氣清丸と宇佐

まよまりのいさか時院宮へ始りたるし

延喜六年日本紀竟宴一神日本般余彦

天皇 大に千古

あはれまのり姫のあまらさやつわのいほりたるん

後田亮 紀伊守

くわこのあめ乃や(電)方とけてさうらーちと我をむし

玉依姫 三統理平

さひとる天の岩舟尋くそ秋の陽よまうらけは

頃我社の午日さひはかりさ

おほいかに海よわ〜れありあらいつきのう〜はあつみん

神宗よと伝わり 貫之

とくあよあまのうぬ神葉のいさかや人のこゝろとらん

源時宗よとあり

まへのさけらあよゆらさるけてあらと誰よとらん

大およ伝わり時勅使よと神よとあうて

よと伝わり 折政をぬ木下

やうなる光よのりり秋もやいとに糸乃社の春乃月
二 辨 勅使よそつり侍りしうらたせよ
てよみ侍り
中 院 入 右 木 下
多らふりふをたまはれに侍りしうらたせよ
入道前因白家百首奇よと侍りよ

皇太后文太後儀

神風やいと川のみらうらにせよとて也
後 院 法 師

神風やいと川のみらうらにせよとて也
入十首うらよと侍りよ

戦前

秋風やいと川のみらうらにせよとて也
社 氏 細 條 といふとて也

大申后の親

いよにいとやまにいと社の都よとて也
香 推 文 乃 秋 といふと侍り

よしん

ふんやあかきあのみあやねのみにとて也
八 幡 文 乃 檢 官 といふと侍り
御 非 末 乃 春 後 といふと侍り

は像のらな

わのあめじ七の社れゆきとんたけととらぬよふか
とてかたて日台の彩さくあはは像わもてはつら
りろくの社ひさりの海見よらとていきてのあ
ふ野よふとてしなりつら

とちあまの身ひわをせてぬきさくあはらけり
徳野(南)うて始つる時みらく花のさうり
とらんとて
白河院御奇

嘆あはれのみとてかたけよ神のらそ
く後のふまいつていんあつて

太上天皇

あよしは昔らとていんあつていんあつて
新交よふとて徳野川よ

く後の川いはいやまのなまなはな波のぬら
白川院く後のふまいつていんあつていんあつて
とてあまのまよとて奇よはつら

徳大寺大僧

あらのちろ志不危の始浦凡まひくと神のら
徳野(南)うてはつらとていんあつていんあつて
あまのまよとていんあつていんあつて

つきて侍一奇

語人多くは

いづらの神を志すらんをうむるをよみのじし海はたまた

徳野乃申交りまて年の月日無交侍い

はりて

ちと天旨

契わさうけしむかおあひあむるを神とりまのえ

加頼守しと侍多り侍白くは満うて多り侍と

思ふ申て目を乃客人のまてよと侍多り

左京守藤浦

ひよとつひの白くはまはひのりたおのまのこま

一品聡子の親王位名ふ侍とてつひよ

侍多りよあり

友原道徳

位よの漢松のえは風吹は浪のまのよあはれな

あつ木の屏風の侍と十一月侍とつる家持し

馬よまて人のゆきと

大申は徳宣御下

柳葉の巻ららうひのまはれとそいれつ能成金

延喜御時屏風より夏神末のつねと侍り

らり

貫之

いづれ乃三好よとつるをなむつとせらるるなひと

新古今和歌集卷第二十

釋教奇

ちんばものちめらうらうらのこせとまわのせちよはわんをうら
うふの思ふふふうけをせちよふふふふふふふふふふふふ
休二奇を法水寺觀音の四奇とまじひつと
あり智縁上人伯耆の大山よゆりていそを
まらる曉夜よみたり奇

山より年ぬる我よりのめとむらひのついでにせうら
かふふの三津寺とわりの葉のそくくんとて

行基菩薩

わんせうく志がせの海のつらまてうらうらうらうらうら
は敷山中堂建立の奇

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提乃佛より我の心は冥加りせし
入唐乃時の奇

智澄大師

わりの舟きしてけがそらうらの船と佛と我をなうた
善提寺乃講堂に柱は木のくひありたり奇
あるわりの時よふふふふふふふふふふふふふふふふ
見よけの望の若くはよみたりてふあり

日蓮上人

帝冥乃若れ若めつけき海のぬれしぬ目なるい
條終正念うしじ事と思ひてよあり

法園上人

さどわさ仏のてよあつたのころそ通ぬらとて
彰しらん

僧部源信

我もやま川松葉のしほもさうとさうぬとあつた
天王寺乃番井の水と所らんて

上東門院

濁るさか井の水と接ひあきて人の舌とすさつるか

法善経廿八品奇人よよとせ侍るらん提

婆おのらん

法成守入道示撰政大臣下

ま川海の底よりさつるをさうは力さうよあつた

勸持本のおあつた

大徳之斎信

かたあぬ表はるふれしうじぬらんかやあつた

又月よりよ雲林院善提講しあつた

侍る

肥後

紫の雲の林とえれしあつたはよあつたの花さつらん

涅槃経より傳くる時多しちり花乃比ま
水もさけわたり花よりさくはまの草のえ
こころそくのを伝はせし愛中よひんれ
おほくろの草

若くはさきし清くたのむる月の影をうぬ
迷懷の奇の中り

未入僧正意圖

新ころい志りやみらよもくひしおほくもさきしはた灯
らくは清くくの白濁よるいよたてつとくをいん事くみま
物来しよらふんゆらうんひつゝのあもさくしん

觀心如月掃着在持務中乃ん哉

權僧正云胤

わのふか夜暗やぬ杖音よかのふも有りま明乃月
家よ百首奇より傳くる時十巻のん哉よこ
傳くる縁覺のん哉

横政大臣大臣

おほくよいんしんせむらうらうらうしんまのん見まそそ
心清のんよあれ

小侍従

あよのいほしんかめいんせむらうらうらうしんまのん見まそそ

撰改古改大臣家百首歌中十集の心と

よと傳りるよ賢最才運来

寐蓮法師

紫の雲海よりうわの事よ浮せとくくよ号の書麻

蓮華初開果

あもやこの浮世のかのまろん花の飛をゆわね

使果不返果

まねとわうぬたよとるあんとくはれらううまわあ

引接縁縁果

あらとりくねと海よと烟とくくえよとくひんか

法華經七八品奇よと傳りるよ方便品唯

有一念法の心哉

前大僧の慈因

いけよとわのほろぬはやわろとて吹風よとくぬ

化城喻品 化作大城郭

ありよよ浮世の中と出とくやろねむし宿るまろり

分別功德品 或住不退地

勢れ山々よとくほの道すくくぬ宿るゆへんか

普門品 心念不定過

とくかんでむしとくたと思ひよあ候ぬ道は紫のま

水渚常不波

兼徳院仲奇

ふかきくほせりさきとさるものみらひるまのりつ

先祖高山

初日とて早めついでにわくわくとまゝに親姉とて言ふ

家より首奇とて侍りつ時不智のんば

妙観案智

入道前園白太政大臣

うにほくふの水とて海にすいひさるりの道とてんき

勸持也

正二位源家

さびとていせいわくもやとてほよ久つう衣と目と

法師也 加刀杖瓦石 念仏故應忍のんば

兼道法師

あつと車の言ひあることとをぬいほせと射の言ひたり

六百弟子也 内秘菩薩行のんば

兼大僧正慈翁

いひの麻とてあつたのりおしもの月とてさつさるる

人ともめては文百とて奇とて侍りつ

二宗但宜 智如管大

兼統法師

道の人の言ひたりとてさるるを徳とていれりやとのえ

菩薩清涼月 遊於畢竟空

雲々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

梅檀香風 悅可衆心

之風之花梅やあけつらんじつおほゆるりとの遊る

作是教已 復至他國

之少つと本のしつとに其をたてわさ之き方此法の家は

此目已過 命即善滅

々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

非啼向咽痛憲本群

素足法師

美つとかりのよふくもらあくぬ海をるる海もあ

并息入無為 卒蓮法師

とじつひつきの世らあうりあひて身ひかるといふ

合會有別部 源季子廣

わひとくと男のまうらう白電れかゝつ世のいづつと

因各欲往ま 疾陀法師

とてあさくまうりいつついつのねらつんとものよつと

心懷恋慕 渴仰於佛

別あそれ面敷のまうらうまうらうとみよ山のく月

十戒奇くく徳々々々不教生戒

ついでに海の子の心はあつたからとてなつてふゆふのこゝろ

不偷盜戒

うしろ菜の葉をすてておとしをてくれぬひよをきと身つらぬ

不邪淫戒

ちぢぢとどりたつて人のこゝろをさし違はせぬ

不沽酒戒

花のよもぎの情をさかして酔ふとちぢぢとぬ

入道前周白家より十如意のちぢぢとぬ

如是報

二條院禪院

うしろ菜の葉をすてておとしをてくれぬ

侍賢門院中納言人よりよもぎをて廿八日

ちぢぢとぬ

教無有量乃のちぢ

皇太后太皇太后

わがはつたかすともてぬぬ楊柳の小さきちぢぢ

養福の院より六時瀆の清よちぢぢ

ちぢぢとぬ

はと因て弥勒喜瞻仰無殊

とそあまの口とて思ひぬ

暁到て浪の都金乃のちぢ

いふ人の危しの種はゆるるはうらむ夜の暁のよ
百首奇中よ毎日晨朝入法定乃ら成

或子門親王

三つたつ暁よ小見わこせいのまのあそび
教心和尚集の奇普門亦種は法思類

選子門親王

道事といひくるとち笑つていひくるとち
六百弟子亦乃ら成

僧於源信

玉ふけいあつとをむしてそとらうらうらふとら

維摩會十前中は法身如身といつらふと

赤波赤門

夏やゆらぐや夏をわらふはるる世にさしひとらん

二月十八日の言わして伊勢大捕りといふ

つらうらうら 相摸

つねらとくらの煙のあふるやあそびとらふ思ふらん

あつ 伊勢大捕

ふいふ海よなわとの山見ひ入日れ氣とさうあつ

依釋迦遺教念流陀と云ら成

肥後

とくをて入りし月のさうせにぬらぬいそをき
お行は神とひ侍らるゝあつらひしりしを
もつらふもつらふし月のあつらるゝあつらるゝ
前とつらふもつらふしつらふしつらふ

待賢門院堀河

あつらふもつらふし月のあつらるゝあつらるゝ

西行は神

あつらふもつらふし月のあつらるゝあつらるゝ
人のあつらるゝあつらるゝ後法縁経世長
昂性安果世界のあつらるゝ

贍西上人

あつらふもつらふし月のあつらるゝあつらるゝ
観心とつらふしつらふ

西行は神

あつらふもつらふし月のあつらるゝあつらるゝ

あつらふもつらふしつらふ

新古今和歌集序

夫和詩者群德之祖百福之宗也玄象天象
又際六情之義未著素務地靜三十一字之深
甫與余來源流寔繫長短雖異或抒下情
而達因或宣上德而致化或屬遊宴之書悵或
採艷色而寄言誠是理也撫民之鴻徽賞心未
事之龜鑑者也是以 聖代明時集而錄之
各窮精微何以漏脫茲猶崑嶺之玉採之者
餘鄧林之枝伐之無尺物既如此歎之宜然仍始
參議右衛門督源朝長通具大慈神藤原朝長



之家左近清權中將藤原朝卡之家前上總介
友原朝卡家隆左近清權少將友原雅經等不擇
貴賤之下令採錦句玉章神祇之詞佛陀之作爲
表布夷雜而同錄始古異首迄于當時彼此總編
各俾呈進每至玄圃花芳之初環砌風涼之夕斟
難波津之遺流尋淺者山之芳渚或吟或詠披犀
象之牙角立黨立偏採翡翠之羽毛裁成而後二十
首教聚而爲二十卷名曰新古今和詠集矣時今詩
物之篇屬四序而星羅衆作雜詠之什並群亦而
雲布綜緝之政益云脩矣伏惟來自代邪而疏

天子之位謝於漢宮而追汾陽之張

今上陛下之嚴親也維吾陳帝道之詔詢日域
朝廷之中主也爭不賞我國之習俗方今奎寄合
神華夷詠仁風化之東方春之日野之榮惠靡之
宴之契千秋之津例之若惟靜誠應立爲五載
之時可願深毫採版之志故撰斯一集而永欲傳
百王彼上古之刀葉集者蓋是和濟之源也編次
之趣用准之儀星序惟選燭射難披延喜有古
今集四人合編命而成之天曆之後撰集二人奉綜
言而成之其後之撰選後撰選金葉詞花千載

等集雖中於 聖主數代之勅 雖恨為撰者一身
之夜 固為訪也 故天曆二朝之遺 卷定以河步 虛
入 革之英豪 排神仙之右 展刊脩之序 而已斯
集之為 移也 先抽其彙 集之中 更括七代 集之介
深意而 傲長言 遺廣求而 斤善而 舉但 雖張網於
山野 傲會自 逃雖 連筌於 江湖 小辨偷漏 誠當視
聽之不 達定有 篇章之 從遺 今只隨採 得且所 勤修
也 抑於古 今者不 載當代 之御製 自後撰 而初加
其時之 天章各 考一部 不滿十 篇而今 不入之 自詠
已餘三 十首六 義若相 兼一而 雜可足 依無風 骨之絕

妙還之 為詞之 多加偏 以軌道 之思不 顧多情 之眼凡
厥取捨 者嘉尚 之餘特 運神襟 伏羲基 皇德而 早方
年異域 自維觀 所造之 書史至 神武用 帝功而 八十
二代當 朝未聽 徽策之 撰集矣 定知天 下之都 人安謳
歌斯道 之遇逢 矣不獨 祀仙洞 吾何之 鄉定有 朝風弄
月之真 之欲呈 皇家元 久之歲 也溫故 知新之 心修撰 之趣
不在茲 乎于時 聖曆乙 丑春三 月云尔

